

語りつづこう平和を くりかえしてはいけない悲惨な戦争！

「戦争はいや！平和のつどい」

名張市南町の名張産業振興センター「アスピア」で3日、市民有志等が主催する「戦争はいや！平和のつどい」が開かれた。2013年から初めて今年で14回目となる。北川裕之名張市長は「日本は戦争ができる国になってきた。それでも、戦争を起こさない、起こさせない覚悟を、私たちは持ち続けていきたい」と挨拶した。（千種啓義）

終戦当時の子どもの目に映った戦争

同市瀬古口の富永義朝さん（89）が、約100人の聴衆を前に、終戦当時8歳の目で見た体験を語った。「戦争中は松崎町に住んでいた。学校の校庭はサツマイモ畑になっていた。月に1・2回校長先生が教育勅語を読み上げた。その間は全員直立不動を命じられた。教室がざわつくとき全員に往復ビンタ。お腹は空しく、嫌な思い出が多かった」

「近所の20歳代の男性が出征した。近鉄名張駅ホームには大勢が見送り、幾度も万歳を繰り返した。無事を祈って子どもの私も千人針を縫った。しかしその人は白い布に包まれた箱に入って帰ってきた」言葉を詰まらせ涙を拭いた。

「1945年6月、神戸を空襲した帰りのB29爆撃機が、日本軍の攻撃を受けて青蓮寺の山中に墜落した。ぼいぼいと落下傘が飛び出すのが見えた。国防婦人会の女性らが竹槍を持って飛び出した。捕らえられた米兵達が警察署にいた。目隠しをされ、後ろ手に縛られ、むしろの上に座らされていた。大人達が『鬼畜米英』とのしりながら

石を投げているのを見て『かわいそうやな』と思った」と振り返り「地震や台風、大雨などは天変地異だが、戦争は人間が起こすもの。平和も人間が起こすもの」訴えるように、富永さんは話を閉じた。

ピースメッセンジャーの生徒達が話す・学ぶ

名張市の五中学には戦争や平和について学び活動する「ピースメッセンジャー」の生徒達が各校2人合計10人いる。そのうち5人がこの日の「つどい」に参加した。彼らは日頃の平和学習、被爆体験者の話、広島修学旅行、この「つどい」やその後の学習を合せ、12月に「平和メッセージ」を発表の予定。5人は夫々「平和はあたりまえではない。平和な生活を潰された人の思いを人々に伝える」「戦争はとんでもなく悲しいこと。自分の国が戦争にならないように役立ちたい」「戦争は始まると簡単には終わらないことを学んだ」「戦争の悲劇を風化させないように人々に伝えていきたい」など自分たちの使命を語った。

この後、実行委員の人々や一般参加者との懇談会に入り、「どんなことがあっても戦争はしたらかん。なつてしまつてからでは遅い」「国の指導者がどのような発信をするのか、見極める力を養つて」など、祖父・祖母が孫に語りかけるような話し合いがもたれた。

展示に苦勞したバックボーンパネル

展示には原爆写真や大陸での日本軍の写真、戦時中の千人針や遺品、広島市立基町高校の生徒が被爆者から聞き描きした絵画など多くの展示品に加え、軍靴、軍隊手帳、訓練用木製銃剣等が参加者の目を引いた。会場の入口から奥に向かって、①戦争の前、大正から昭和へ。②戦争の始まり、大陸へ。③戦争の拡大、アジア太平洋戦争へ。④戦後の暮らし。と時系列の体系パネル

が並び、この「つどい」のバックボーンとなっていた。中に「大も戦場に行った」エピソードがあり、読んだピースメッセンジャーの山本惺さん（桔梗が丘中2年）は「知らなかった。戦争は人間だけでは無かつたんだ」と驚きを新たにしていた。

委員会事務局の羽口和彦さん（74）は「今日は100人ほどの皆さんが、熱心に参加していた。1917～1945年まで体系的に戦争の前後が理解できるようにした。更に充実していきたい」と、「つどい」の今後に手応えを感じていた。



展示物を前に語り合う参加者



ピースメッセンジャーと実行委員の人々らの懇談会



体験を語る富永義朝さん